

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07170

研究課題名(和文)道観関連資料を基軸とした明代道教の宗教活動の基礎的研究

研究課題名(英文)A basic study of the religious activities of Ming Daoism with a central focus on the materials concerning the Daoist palace

研究代表者

酒井 規史(SAKAI, Norifumi)

慶應義塾大学・商学部(日吉)・講師

研究者番号：60781929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明代の道教について、宮観志や地方志など道観に関する資料に注目して、その道観制度と道士の活動を明らかにすることを目指すものである。研究成果として、以下の数点があげられる。(1)フランスの高等研究実習院(パリ)で開催された国際学会"Hoy sites and pilgrimages"における学術発表と、その内容にもとづく論文の作成、(2)宮観志の版本調査、(3)江蘇省・浙江省における道観や宗教聖地の遺跡の現地調査、(4)国立政治大学華人宗教研究所(台北)における講演会。

研究成果の概要(英文)：The aim of my study was to focus on the materials concerning the Daoist Palace(Daoguan) and to examine the institutions of Daoist Palace and the activities of Daoist priest(Daoshi) in Ming China.The results of the study include (1)the presentation in international conference"Hoy sites and pilgrimages" at EPHE(Paris) and the research paper based on it; (2)researches of some corographies of Daoist Palace(Gongguan zhi) in several libraries; (3)the field survey of the remains of Daoist Palaces and Holy Sites in Jiangsu and Zhejiang area; (4)the lecture at Center for the Study of Chinese Religion of National Chengchi University(Taipei).

研究分野：中国思想

キーワード：道教 道観 道士 中国宗教 中国思想 明代

## 1. 研究開始当初の背景

中国のベーシックな宗教である道教については、その成立・確立期である六朝時代や唐代の研究が多く行われてきた。近年においては、その後の宋元時代、清末・民国期の道教研究が盛んになっている。しかし、現代の道教の基礎が形成された明代の道教研究については、研究の蓄積がそれほど多くない。また、仏教や民間信仰などの周辺分野と比べても、研究は不十分といえる。

明代では歴代の皇帝が道教を統制する一方で、保護・信仰した。そのため、政治との関わりを考察する史学方面の研究が多い。明朝の道教管理政策・皇帝や皇族と道教のつながり・皇帝の保護を受けた聖地(武当山など)や道観・高位の道士などについては比較的研究がある。

また、教理についての研究では、主に内丹思想の研究がなされてきた。しかし、道教の主たる宗教活動である儀礼については、本格的な研究はなされておらず、明代に編纂された多数の儀礼書についても検討が不十分である。

つまり、皇帝と関わるような高位の道士や特定の聖地などの特殊なケースや教理面についての研究は行われてきたが、一般的な道士の日常的な宗教活動という、非常に基礎的な部分についての解明が進んでいないのが現状である。特に儀礼についての研究はまだ不十分である。

そこで、本研究では明代道教の宗教活動を解明する上で、道士の宗教活動の拠点である道観に着目して研究を遂行することを目指した。道観における日常的な活動こそが、道士の宗教活動の基盤といえるからである。資料面においても、道観に関連する資料、特に宮観志(地方志の道観版)には、道士の宗教活動に関する情報が多く含まれているので、特に着目して研究を進める必要があった。

研究代表者はこれまで、宋代から元代にかけての江南地域の道観について、宮観志を活用しながら、道観の運営・管理制度や道観で挙行された儀礼の研究を進めてきた。その延長線上にあるのが本研究である。

## 2. 研究の目的

研究期間が一年半に限られているので、本研究では、まず明初の首都である南京の道観を基点に調査を開始し、道士の活動内容と法脈、各道観の勢力範囲という、宗教活動の背景を明らかにすることを目標とした。また、その上で周辺の江蘇省・浙江省に調査範囲を広げていき、今後も継続する明代道教研究の基礎を確立することをめざした。その際、以下の三点について特に注意した。

### (1) 道観の運営制度

道士は各道観において各種の役職を担当していた。それは道士の集団生活に必須である一方、一般社会との接点を持つ場合もあり、

世俗的な側面もある。

これまでの研究では、明朝が道観を管理する制度については明らかにされてきたが、道観内部における道士たちの役割分担や、道観の運営方法などについては注意が向けられていなかった。道観における道士の活動を、できるかぎり日常的なレベルまで掘り下げて研究することで、当時の一般的な道士の活動の様相をより明確にするのを目的とした。

### (2) 道士の宗教活動(儀礼)の実態解明

明代の道観における道士の宗教活動のうち、儀礼に注目した。道教には目的に応じた各種の儀礼があるが、どのような儀礼が行われたかを調べることで明代にどのような宗教的なニーズがあったかを明らかにすることができる。つまり、道士の活動の社会的背景を探る試みである。

第二に、明代の儀礼書の編纂の背景を知るためである。現在の道教研究の基本資料である『正統道蔵』には、明代に編纂されたと思われる儀礼書が多数含まれている。ところが、これらの儀礼書の研究は十分に行われていたとはいえない。儀礼書の編纂の背景をさぐる上でも、儀礼に関する記述を整理・分析する必要がある。

### (3) 道士・道観のネットワーク

各道観における道士の伝記資料を分析することにより、以下の二点を解明することをめざした。

第一に、道士の師弟関係と、それによって生ずる道観のネットワークである。ある道観で修行して実績を積んだ道士は、師や兄弟子たちの後を継ぎ、その道観の住持や要職をつとめる場合が多い。その一方で、いわば分家のようなかたちで新たな道観を創建する場合もある。道士の伝記資料から師弟関係を整理していくことで、道観のネットワークや勢力範囲も明らかにできる。

第二に、道士の師弟の間で伝授された經典・儀礼書などの系統を追うことによって、その法脈や教派について明らかにすることができる。従来の道教研究では明代もふくむ各時代の教派についてさまざまな見解が出されてきたが、いまだに解決を見ていない。明代道教を理解する上で、各地における道士の法脈の研究は必須のものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の方法により研究を遂行した。

### (1) 文献調査

本研究でメインとなったのは、宮観志や地方志など道観に関する資料を利用した文献調査である。また、各種のデータベースも利用して、効率的に調査を行うことも心がけた。

はじめに、南京の道観に関する資料を集めた『金陵玄観志』を基礎にして調査を進めた。

南京は明初の首都でもあるため、本研究の目的である明代道教研究の基礎を確立するためにはかっこうの資料である。また、『金陵玄観志』には、道観の沿革・規模・建築の構成・所有地などの基礎的な情報に加え、関連する碑文・詩文などが広く収集されており、非常に情報量が豊富である。また、明代以前の資料も記載しているため、通時的に各道観の沿革を知ることができた。

『金陵玄観志』の分析で調査の基礎を作った上で、南京周辺の江蘇省や浙江省の道観へ調査を拡大していった。宮観志のほか、文人の残した碑文・筆記資料・地方志なども参照した。さらに、研究代表者がこれまで蓄積している宋代・元代のデータと合わせて、明代初期の資料の分析を進めた。

#### (2) 宮観志の版本調査

道観を調査する際に重要な資料となる宮観志は、近年、各種の影印本や叢書が出版されるなど、利用が格段に便利になっている。しかし、いまだにテキストの整理が十分に行われておらず、各種版本の整理もまだ不十分である。そのような中、新資料の発見の可能性も高いと判断したので、各地の図書館における版本調査も行った。上記の文献調査を補完する試みでもある。

#### (3) 現地調査

上述の文献調査を補完するために、道観や宗教聖地の遺跡におもむき、宗教活動を解明する上で重要な手がかりとなる石碑などの文物、聖地の地理的状況などの調査を行った。また、これらの調査には文献資料の記述内容を確認するという意味もある。

### 4. 研究成果

本研究による研究成果は以下の四点にまとめられる。

#### (1) 国際学会における口頭発表と論文作成

文献調査では、計画通りに、明代初期の首都・南京の道観についての資料を集めた『金陵玄観志』と、関連する資料の調査を実行した。その際、道観の管理・運営制度に特に注目して調査を行った。また、南京だけでなく、その周辺の江蘇省の道観についても、これまで蓄積してきた宋代・元代のデータを合わせて考察し、各道観の沿革や動向を整理した。さらに、各道観に関連する道士の伝記資料も調査した。その結果、宋代から元代を経て、明代初頭にまで至る、南京と江蘇省の道教の動向について見通しを得ることができた。

その成果をもとに、2017年3月24日から25日かけてフランスの高等研究実習院(パリ)で開催された国際学会「Holy sites and pilgrimages. The Daoist living tradition and comparative perspectives on East Asian Buddhist, imperial and local practices」において、「南京朝天宮前史 元代江蘇道教

與龍虎山道士」という題目で研究発表を行った(中国語を使用。)宋元時代の南京と現在の江蘇省にあたる地域における、道士の活動や道観の管轄方法を明らかにしたものである。とりわけ、元代から明代にかけて江南道教を管轄していた龍虎山系の道士たちの活動に注目して考察を進めた。龍虎山系の道士たちが当該地域に進出した結果、それまで強い影響力を持ってきた茅山の道士たちの勢力が相対的に弱まったことを示した。主に宋代から元代後半に焦点を当てた考察ではあるが、明代初頭の状況にも言及し、今後の方向性を示すことができた。

その後、この国際学会をもとにした、土屋昌明・Vincent Goossaert 編『第二回日仏宗教研究者会議論文集: Holy sites and pilgrimages(仮題)』が出版されることになり、「南京朝天宮前史 宋元明江蘇道教と龍虎山道士」という論文を寄稿した。口頭発表の内容に加えて、明初の南京朝天宮における龍虎山系の道士の活動を整理し、より研究課題に沿ったものに修正した上で入稿した。英語もしくはフランス語に翻訳されることになっているので年度内の公開はかなわなかったが、Brepols Publishers から出版される予定である。

その後も、計画通りに文献調査を進め、特に現在の江蘇省・浙江省に相当する地域を中心に、明代の道教に関する記事を収集・整理した。また、並行して研究成果を発表できるよう準備を進めた。しかし、2018年3月に河南師範大学で開催される予定であった国際学会が中止になり、成果を発表することができなかった。これらの文献調査による研究成果は、近い将来にあらためて発表することにしたい。

#### (2) 版本調査

また、尊経閣文庫・国会図書館・国立公文書館で版本調査を行った。その結果、研究者の間でもあまり知られていない宮観志の版本をいくつか実見し、複写することができた。また、各所蔵機関における所蔵状況もおおむね把握することができた。

実見できた版本については今後研究に使用し、また必要があれば内容を随時紹介していくことにしたい。

#### (3) 現地調査

2017年9月に南京・宜興・湖州・徳清・杭州において、道教の宗教聖地・道観・民間信仰の廟(およびそれらの遺跡)の現地調査、各地の博物館における宗教に関する文物の調査を行った。

また、文献資料の記述と現況との比較も行った。この地域は六朝時代から道教の信仰がさかんであり、現在にいたるまでの歴史的流れについても知識を深めることができた。

この調査については、「第五十九福地「張公洞」と周辺地域の宗教関連遺跡の現況 南

京・宜興・湖州・徳清を中心に」という題名の調査報告を作成し、『洞天福地研究』第8号(好文出版)に寄稿した。近日中に公刊される予定となっている(本報告書の作成時点で入稿・校正済み)。

(4) 学術講演

以上の研究成果を総括して、台湾の国立政治大学・華人宗教研究所で「宮觀志的道教研究価値 以道觀制度与道士活動为中心的討論」と題した講演会を行った(中国語を使用。)現在までの文献調査と分析の内容、および現地調査・版本調査の成果の一端を中国語で発信することができた。また、講演のあとで現地の道教研究者と意見交換も行い、貴重な示唆を得ることができた。

なお、こちらはもともと研究期間内の2018年3月12日に行う予定が諸事情で延期となってしまう、2018年5月7日に実施したのを付記しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

酒井規史、第五十九福地「張公洞」と周辺地域の宗教関連遺跡の現況 南京・宜興・湖州・徳清を中心に、洞天福地研究、査読無、第8号、2018年、ページ数未定(近日刊行決定。入稿・校正済み)

[学会発表](計2件)

酒井規史、宮觀志的道教研究価値 以道觀制度与道士活動为中心的討論、国立政治大学華人宗教研究所(台北)、2018年5月7日

酒井規史、南京朝天宮前史 宋元時期度江蘇地区的龍虎山道士、第二回日仏中国宗教研究者会議「聖地と巡礼」Holy sites and pilgrimages. The Daoist living tradition and comparative perspectives on East Asian Buddhist, imperial and local practices、高等研究実習院(EPHE)(フランス)、2017年3月25日

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

土屋昌明・Vincent Goossaert 編『第二回日仏宗教研究者会議論文集：Holy sites and pilgrimages(仮題)』に「南京朝天宮前史 宋元明江蘇道教与龍虎山道士」という論文を寄稿した。英語・もしくはフランス語に翻訳された後、Brepols Publishers から出版される予定である。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井規史(SAKAI, Norifumi)  
慶應義塾大学・商学部・講師  
研究者番号：60781929

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )